

第3分科会

水と食から 地域を見直す

～毎日の生活の中にこそ、価値あるものが～

担当団体 / はりんこ塾

おいしい豊かな水が、私たち日本人の食文化を支えている。農薬や食品添加物の使用、また食品偽装など、食の安全に不安がささやかれている現代において、地域の自然の素材と豊かな水によって支えられてきた日本型の食文化が見直されている。水と食に関わるパネリストを招き、ディスカッション形式で「水と食」「食と地域」「水と地域」との関わりの中から、新たな地域資源発掘の切り口を考える。

パネリスト

松中 滋氏 (まつなか しげる)
NPO法人竹の浦夢創塾 理事長

木村 源一氏 (きむら げんいち)
(有)木村屋靴店 16代目

藤木 克彦氏 (ふじき かつひこ)
はりんこ塾 事務局長

コーディネーター

近藤 哲史氏 (こんどう てつふみ)
(財)石川県産業創出支援機構コーディネーター

はりんこ塾

平成5年に美川地域在住のさまざまな職業・分野のメンバーで発足。行政のまちづくり施策への提言等を行っていたが、平成7年より地元で生息する淡水魚トミヨの保護を切り口として活動。現在のテーマは美川の「食文化」。

<http://www2.nsknet.or.jp/~fujii1/index.htm>

1. 分科会の趣旨

第3分科会担当団体は、湧水のある清流にしかすめない淡水魚「トミヨ」の保護活動を中心にまちづくりを考えてきた「はりんこ塾」。近年は「食」をテーマにまちづくりを模索している。

この分科会、白山市内3箇所の水を飲み比べて美川地域の伏流水を当てる利き水から始まった。首をかしげながらも果敢に利き水に挑戦する参加者たち。正解発表により、顔がほころぶ人、落胆する人と、さまざまではあったが、参加者の意識が高まる中、パネルディスカッションがスタートした。

コーディネーターに石川県産業創出支援機構の近藤哲史氏、パネリストにNPO法人竹の浦夢創塾理事長の松中滋氏、(有)木村屋靴店十六代目の木村源一氏、まちづくりグループはりんこ塾事務局長の藤木克彦氏を迎え、会場からの意見等も交えながら活発なディスカッションが行われた。

2. ディスカッションの内容

- ・水は食と環境に深く関わっている、もっと皆さんに水のことを考えて欲しいと、淡水魚トミヨの保護活動をとおしてまちづくりを行ってきたはりんこ塾塾長荒木敏明氏の開会挨拶で幕が上がった第3分科会は、はじめに白山市内3箇所の水を飲み比べて美川の白山伏流水を当てる利き水が行われた。他の2箇所は、白峰のわさび田のわき水と



会場の様子



白山市内の水の飲み比べ

白山市庁舎(松任)4階の水道水。首をかき上げながらも皆さん真剣に利き水を行い、その後に行われた討論の良き呼び水となったようだ。

- ・利き水の後のパネルディスカッションでは、近藤哲史氏(石川県産業創出支援機構)によるコーディネートのもと、パネラーは、いろいろな発酵食品による地域おこしを仕掛けている松中滋氏(竹の浦夢創塾) 商店街のまちづくりを学んできた木村源一氏(木村屋糰店) トミヨの保護活動をおして水の大切さを説く藤木克彦氏(はりんこ塾)の3名で、おのおの熱い思いを核とするディスカッションが行われた。
- ・松中氏は小学校でのぬか床教室や、竹の浦館での北前船の保存食が始まりと言われるさばの糠漬(へしこ)などの伝承料理教室をとおして「発酵食品」による地域おこし活動を継続的に行ってきた。また、新しい試みとして、味噌・醤油・酒などの発酵食品に携わっている人たちの協力により、地元産のタケノコを原材料とする酢造りにも取り組んでいる。

水との関わりについては、竹の浦館の食堂で提供している枯れ松葉で炊いた伝統的な「こっさ飯」や豆腐の評判がとてもよいが、これは地元の良質な地下水のおかげでもあるという。

松中氏は、地域の新しい価値を見出すためには、発酵食品ができあがるのに時間が

かかるように、じっくりと歩いて見ることが大切と説く。高度成長により便利になったが、見落としてきたものがたくさんあるのではないかと。

- ・木村氏の木村屋糰店は、江戸元禄年間より三百余年受け継がれてきた老舗であるが、糰・味噌の製造販売はもとより、伝統的な食文化を守るため、ホームページや店頭で、その使い方(レシピ)の発信も行っている。自らをマニュアルで育ったマニュアル世代だという木村氏は、公民館活動やPTA活動で大根寿し作りに取り組んできたが、このマニュアル世代はマニュアル(料理の場合はレシピ)があれば伝統的な料理もこなせるという。

米や大根は用水の水で育ち、ブリやニシンは海の水で育つ。大根寿しと水との関係も深いものがあるという木村氏。大根寿しの味付けが年々甘くなってきているという。伝統の味にとらわれることなく少しずつ違いながらも引き継がれていけばよいのではないかと。

- ・はりんこ塾の藤木氏は水そのものの大切さを説く。地球はその3分の2が水に覆われているといわれているが、98%は海水だという。人間が直接使える水は0.0001%に過ぎない。日本は水に恵まれている。その中でも北陸、特に白山市は。そのことをもっと認識すべきだという。また、藤木氏は職業柄(旅行会社勤務)、日本全国世界各地に出かけることも多いのだが、地元の話は、外に出て行かないと気が付かないのではないかと。地元の伝統的なことを見直して、周りと比べてみることにより、地域の良い点が見えてくるのではないかと。
- ・このディスカッション、後半は、地域の特色が反映されている料理といえば雑煮や祭りの料理であり、これらの掘り起こしを行ってはどうかという参加者から出された意見でさらに盛り上がりを高めていったので



パネリスト
松中 滋氏

パネリスト
木村 源一氏

あるが、コーディネーターの近藤氏により次のように締め括られた。

伝統的な食文化は次世代につなげていかなければいけない。部屋が別、食事も別と、日本はあたかも多民族国家となりつつあり、家族というものが成り立たなくなっている。毎日の食事が健康と家族の対話を生み出す。食は地域を考えるに当たって、とても重要な要素である。

3 . 開催で得たもの、新しい発見

- ・竹の浦地域の地下水は良質で、ごはんを炊いたときに水の良さがよくわかる。同じ水を使って作る豆腐の評判もよい。良質な地下水は食を美味しくする。
- ・用水の水で育つ米や大根、海で育つブリやニシン、地下水に限らず水は食にとって重要な要素である。
- ・大根寿しは昔に比べて甘くなっている。食に関する伝統は、時代により変化している。
- ・外に出て行かないと気づかないことがある。地域の伝統的なことを見直して、他の地域と比べてみると良い。
- ・能登では「能登井」が話題となり、白山ろくでは「白山百膳」が始まった。活性化資源としての「地域の食」をもっと知る必要がある。



パネリスト
藤木 克彦氏

コーディネーター
近藤 哲史氏

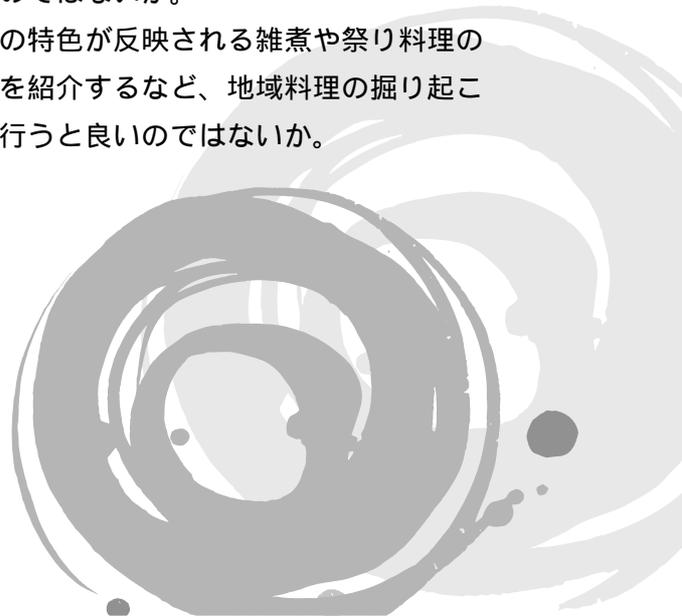
4 . 今後に向けた展開

地域の水で育った食材は、地域の水で料理され、地域固有のおいしい料理となる。

地域の伝統料理の見直しと、白山のおいしい水を活用していくための方策、地域の地域に根づいた地道な活動と、その活動を倍加して発信していくような仕組みづくりの検討が必要である。

5 . 参加者の声

- ・水の知識は全国共通であり、白山市の特産品をインセンティブとした水検定を行ってはどうか。
- ・白山市の豆腐や米に、白山市の美味しい水を付けて売るぐらいのことを考えていかなければいけない。
- ・スイスのチューリッヒのような飲泉場を設置できないか。
- ・バイオ燃料の影響やかんばつの被害などで小麦が値上がりしているが、親しみが持てる地元産の米の粉でパンやケーキを作ると良いのではないか。
- ・地域の特色が反映される雑煮や祭り料理の違いを紹介するなど、地域料理の掘り起こしを行うと良いのではないか。



第3分科会 参加者アンケート【参加者：33、アンケート協力者：18】

分科会を選んだ理由

- ・水と食を題材とした分科会に興味があったから
- ・知人に誘われて
- ・今春から美川の地で働くことになり、この地域を知りたいと思ったこと。また、水と食について興味があった
- ・水は全ての営みの中心であり、日常生活の中でも一番重要なものであるため
- ・クラブの動員による
- ・食に関心があり、食の安全、安心の中で水に興味を持っているから
- ・身近なものから地域の活性化のヒントがあると思われたから
- ・農業と集落の朝市を実施するも、ペケの農産物を活かさないか
- ・地元団体の方がパネリストだから
- ・今の時代にマッチしていた
- ・出身地域のことが話題となるため
- ・はりんこ塾のメンバーがパネリストになっているから

分科会はいかがでしたか？

- ・水と食の関わり合いがもっと具体的に多く発言があると良かった
- ・「はりんこ」については認識を新たにした
- ・今後のヒントがあり、参考になった
- ・人数が多かったことが逆に発言の少なさにつながったのかな
- ・水をキーワードで地域づくりの内容とは少し違っていたように思われた
- ・地域について深く考えさせられた時間となった
- ・自分の地域には水、食にしてもおいしいし、その他にも宝物がいっぱいあることは、幸せなことであると気づいた。特に美川は平成の名水に指定されたこともあり、もっと水をPRすべきと思った
- ・座談会はテーブルなしでもっとリラックスした形式のほうが良かった
- ・メンバー同士の交流をもっとしないといけない
- ・いろいろな方の立場が判り、参考になった
- ・良いテーマで勉強になった。水をテーマは深いテーマだった
- ・具体性に不足を感じた
- ・大変有意義であった



会場の様子



会場の様子